

⑯ 日本国特許庁 (JP) ⑰ 特許出願公開
⑰ 公開特許公報 (A) 昭55—91317

⑮ Int. Cl.³
A 47 G 9/00

識別記号 厅内整理番号
7030—3B

⑯ 公開 昭和55年(1980)7月10日

発明の数 1
審査請求 有

(全 4 頁)

⑯ 自動枕

⑰ 特願 昭53—165222
⑰ 出願 昭53(1978)12月29日
⑰ 発明者 大塚博司

飯塚市大字相田259
⑰ 出願人 大塚博司
飯塚市大字相田259
⑰ 代理人 弁理士 矢野武 外1名

明細書

1. 発明の名称 自動枕

2. 特許請求の範囲

1 2枚の板体の間に所要強度のはねを介在させて2枚の板体間を圧縮自在とし、板体のうち少なくとも上部の板体には空気流通孔を開口し、当該上部の板体の上に空気流通性のクッション材を被せ、このクッション材の上面を除き、クッション材と両板体を横み重ねたものの全側面及び底面を気密性カバーで覆い、更に全体を包布で覆つたことを特徴とする自動枕。

2 クッション材を2層とし、上層を非保温性素材としてなる特許請求の範囲第1項記載の自動枕。

3. 発明の詳細な説明

本発明は仰向けや横向きの姿勢で寝る時に、常に最適な頭の高さに自動的に変化する自動枕に関するものである。

従来の枕は、頭を載せた場合その高さはほとんど変わらないため、仰向けの姿勢では高さがちょうど良くても、横向きになると低過ぎるという欠点があつた。また、従来の枕はほとんど内部の空気の流通が無いために頭を載せた部分の温度が上がり、特に熱がある場合や夏期においては快苦しくなり、熟睡できないという欠点もあつた。

本発明は、これら従来の欠点を解消し、寝る姿勢を変えても常に最適な頭の高さに自動的に変化し、併せて空気の流通を促進させることにより頭部の温度を上昇させないような自動枕を提供することを目的とするものである。

この発明は2枚の板体の間に所要強度のはねを介在させて2枚の板体間を圧縮自在とし、板体のうち少なくとも上部の板体には空気流通孔を開口し、当該上部の板体の上に空気流通性のクッション材を被せ、このクッション材の上面を除き、クッション材と両板体を横み重ねたものの全側面及

び底面を気密性カバーで覆い、更に全体を包布で覆つたことを特徴とする自動枕である。

本発明を以下、図面に示す実施例に基づいて説明すると、図中(1)は上部板体、(2)は下部板体、(3)はばね、(4)は空気流通孔、(5)及び(6)は空気流通性のクッション材、(7)は気密性カバー、(8)はそばがら等の非保温性素材、(9)は包布、(10)、(11)は支え棒、(12)は同支え棒(10)との中心部の枢軸、(13)は上部板体(1)又は下部板体(2)から突設されたピン受突起、(14)は連結リンク、(15)は同連結リンク(14)側のピン、(16)は連結リンク(14)と支え棒(10)又は(11)との枢ビン、(17)はばね(3)係止用突起、(18)は最大高さ制限用紐、(19)は締固定具を示す。(5)及び(6)のクッション材としてはポリウレタンフォーム等の空気流通性発泡樹脂を使用することができ、気密性カバー(7)としては合成樹脂シートを使用することができる。支え棒(10)及び(11)を交叉状に上部板体(1)と下部板体(2)との間に介在させることにより頭を載せる位置を

(3)

(5)、(6)は上面を除き気密性カバー(7)で覆われているため、空気は無駄なく上面に流通し、上部板体(1)と下部板体(2)との間の空気の容積変化分がそのまま枕上面の空気の出入量となる。この出入する空気によつて頭部は冷却され、殊に熱がある場合や夏期においては、この冷却効果により安眠できることになる。特にそばがら等の非保温性素材(8)を枕の上段の頭が接する部分に配置することにより冷却効果は促進されることになる。

上述したように、本発明によれば、枕を使用する者の体型や姿勢に応じた頭の高さに自動的に変化するため首に負担が掛らず、寝ちがいを防ぎ、安眠ができ、また寝ちがいやむち打ち症等の治療効果も期待でき、しかも空気の流通によつて温度上昇を防ぎ、頭部を冷却できるので安眠を促進できるこという効果を挙ぐるものである。

4. 図面の簡単な説明

発明

第1図は本発明の実施例を示す断面図、第2図

枕の中心部から偏らせた場合でも上部板体(1)が傾くことがなく、下部板体(2)と平行な状態で上下するので頭が枕から滑り落ちることがないようになりますことができる。なお、ばね(3)の力はばね定数やばねの個数によって各人に適合したものとすることができる。

本発明では、上記の構成よりなるため、仰向けの姿勢と横向きの姿勢とでは頭の高さが変化する場合、その高さに応じて、ばね(3)の抗力により上部板体(1)が上下するため、枕の高さが自動的に上下することになり、枕を使用する者の胸囲、肩巾胸囲、頭重に応じて最適の高さに変化することになる。

また、上部板体(1)には空気流通孔(4)が設けられているため、上部板体(1)と下部板体(2)との間の空気が両者の上下動によつてこの空気流通孔(4)から出入し、クッション材(5)、(6)を通じて枕の上面より空気が流通することになる。しかもクッション材

(4)

及び第3図は第1図のI—I線及びII—II線における断面図、第4図は板体の内部構成を示す一部切欠平面図である。

(1) : 上部板体

(2) : 下部板体

(3) : ばね

(4) : 空気流通孔

(5), (6) : クッション材

(7) : 気密性カバー

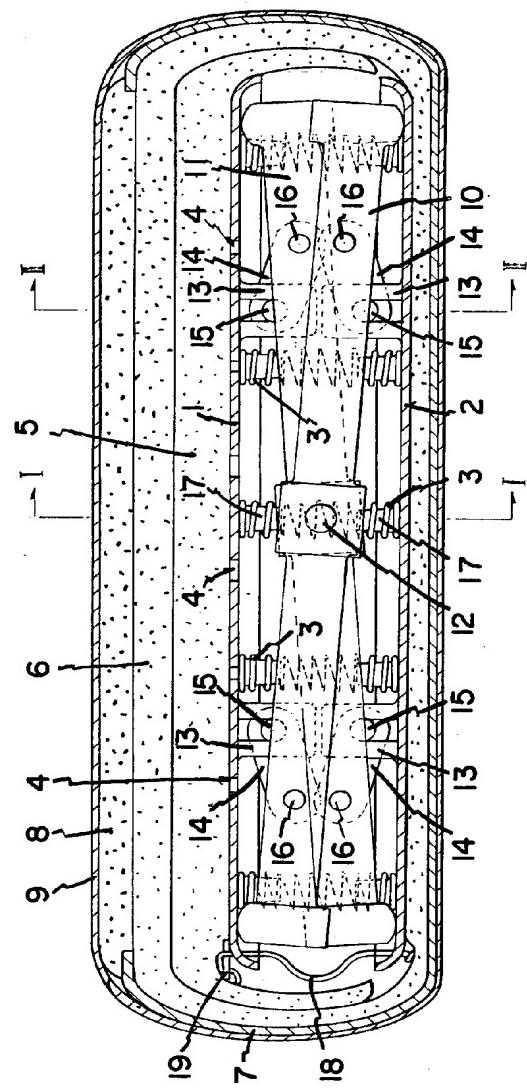
(8) : 非保温性素材

(9) : 包布

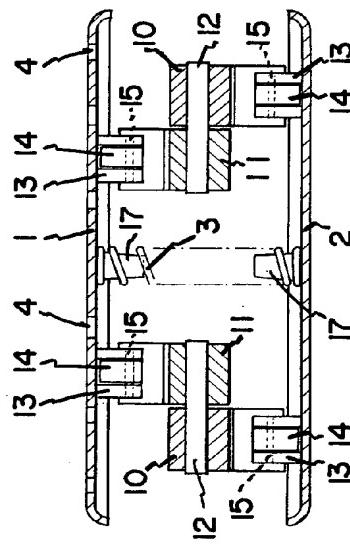
特許出願人 大塚博司

代理人 矢野武
(ほか1名)

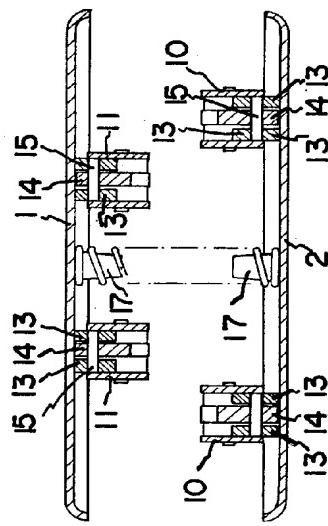
第1図



第2図



第3図



第 4 図

